

所 陵

No. 68

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



チャグチャグ馬コ (岩手県民芸品)

● 目 次 ●

造幣博物館を訪れて	池島 正興	2
頭を渡す	黒田 一充	6
三村幸一が撮った民俗写真から 50 年	吉野なつこ	10
民芸のやきものを訪ねて	熊 博毅	12

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

造幣博物館を訪れて

池 島 正 興

造幣局は「桜の通り抜け」で大阪人には、なじみが深い。

造幣局の地には、かつて江戸時代に藤堂藩蔵屋敷が里桜を育成しており、その桜を敷地とともに受け継ぎ、1883（明治16）年には、花見を広く市民にも開放するようにしたことから、「桜の通り抜け」が始まったと言われている。

その「桜の通り抜け」の進行コースの通路の一端に隣接して造幣博物館がある。

歴史を感じさせる煉瓦造りの美しい建物である。もともとは、1911（明治44）年に火力発電所として建設された、造幣局に残る唯一の明治時代の建物でもある。

1階のエントランスで迎えてくれるのが、「明治十年」の発行年が刻まれた20円金貨の大きなレプリカである。

わざわざ、明治10年銘の「金貨」が展示されているのは、その希少性の高さ、によるらしい（たとえば明治3年の20円金貨の発行数は46,139枚であるのに対し、明治10年のそれはわずか29枚である）。



2階と3階が展示室となっている。

2階は「造幣局の歩み」「造幣局の仕事」、3階は「貨幣ギャラリー1」「貨幣ギャラリー2」の各コーナーから構成されている。

さて、2階から展示を見ていこう。

最初の、創業時の功労者の紹介コーナーを過ぎると造幣局の創設に関わる諸資料が展示され

ている。それらは興味ある事実を教えてくれる。

まず驚かされるのは、近代国家建設の礎となる貨幣制度の確立には、貨幣鑄造を担う政府機関たる、造幣局の設立が不可欠であるが、それが東京ではなく大阪に建てられたことである（現在でも、造幣局は大阪に本局を置く、唯一の政府機関である）。



ただ、その理由については、王政復古に貢献した大阪財界への配慮、当時の東京の治安の悪さ、などの諸説があるが、未だ定かでない。

そして、水利が良くて面積が広大、という条件に合う、天満の地が選ばれ、当時世界最大規模の造幣局が建設されたのであるが、その敷地には、「大塩平八郎の乱」で有名な大塩平八郎を含め、多くの与力の屋敷がかつて存在したことが、「文政六年川崎村与力屋敷復元図」で示されている。



造幣局の創設時の経済活動も興味深い。

造幣局は香港から大型機械を輸入する一方

で、それ以外の、貨幣の鑄造や、さらには輸送に必要なものを、近代産業が未発展のもとで、自給自営で賄っている。自前で、鉄道馬車、蒸気船で陸・水運を開き、電信を敷設し、硫酸などの工業薬品や小さな機械器具類の生産、ガスやコークスによるエネルギー供給などを行っている。造幣局の日本人技師が自作した、大時計、手回し计数器、天秤は展示されている。



造幣局は貨幣鑄造を核とする、先進的な総合型企業であり、その後に、多くの事業を民間に委譲している。また日本で初めて複式簿記を採用し、さらには、職員やその子弟に英語や工学の基礎知識を修得させるために、私立学校「日進学社」を創設している。経済・経営・教育などでの先駆的取り組みで造幣局が大阪経済のみならず日本の近代産業発展に大きく貢献したことに、認識を新たにさせられる。

実際に使用された、「日進学社」の教科書や複式簿記の洋式帳簿が展示されている。その帳簿は厚さが30センチ以上にもなろうかと思われる大型のものであり、その天地には複雑な紋様が書かれている。それは決して装飾ではなく、仮に、帳簿の1ページでも抜き取られたら、すぐに発覚するという工夫らしい。



さて2階には、他に、手彫りの試作貨幣、貨幣製造の極印を手彫りから機械製造へと大変革

させた1925（大正14）年に購入の輸入縮影機、日本初の近代的貨幣法規である1871（明治4）年布告の「新貨幣条例」の原本とその印刷版木、徳川時代の金銀貨幣と新貨幣との引き替えを約束した「古金銀預かり証券」とその印刷原版、など貴重な資料が展示されている。



3階では「古代中国の貨幣」「わが国最初の貨幣」「古代～中世の貨幣」「江戸時代の貨幣」「近世の貨幣」「外国貨幣」「記念貨幣」のコーナーに区分されて貨幣が展示されている。

そのフロアーの中心部分では、貨幣がガラスにはめ込まれ、裏表両面から見るようにされている。

そこに展示されているのは、豊臣秀吉が造った、貨幣史上最も豪華と言われる「天正菱大判」と世界最大級の金貨である「天正長大判」、江戸時代の、「元禄大判」「慶長大判」「慶長小判」「慶長一分金」、わが国の金本位制最後の金貨となった、1930（昭和5）年製造の「20円金貨」、また、1935（昭和10）年に淀川で偶然見つけられた、現在造幣博物館のみが所蔵する、「竹流金」と「菊桐金錠」、などである。

大判・小判や金貨が時代を超えて華々しく光り輝いている。



そして、「古代中国の貨幣」から「近世の貨幣」まで順次コーナーを見学していけば、わが国の貨幣制度の長い歴史的歩みを通観できるようになっている。

そこでは、関西大学とも縁の深い奈良県明日香村から1991（平成3）年に出土した、わが国初の貨幣である富本銭を、出土状態そのままに忠実に再現したレプリカや、1921（大正10）年に出土した、わが国初の流通貨幣とされる和同開珎（708年発行）の鋳型、の実物など、これまた貴重な資料が展示されている。



それらを含めて、展示コーナーを詳細に紹介するには紙数の制約がある。以下、貨幣史の門外漢である私にとっての発見や印象深く感じたことを中心に述べる。お許し願いたい。

展示を見て強く感じたことの一つは、貨幣の発行・流通の分野においても、中国が、わが国に大きな影響を与えていることである。

中国では約3500年前に子安貝を貨幣として初めて使用し、その後、金属貨幣を鋳造し、西暦前221年には、秦の始皇帝が現在の貨幣のルーツとされる、円形方孔（丸い形に四角の穴）で額面を記した半兩銭を造っている。



そして、その形状を継承した、621年初鋳の中国の開元通宝をモデルに、わが国で富本銭が鋳造されている。

それだけではない。鎌倉・室町幕府は貨幣の鋳造を行わず、そのために外国の貨幣（渡来銭）が国内で大量に流通することになった。その渡来銭の中心が中国の永樂通宝であり、それは徳川時代に寛永通宝が鋳造されるまで、国内の基準通貨として流通した。

そうした事実を教えられると、なぜ、わが国の貨幣の歴史を表す展示コーナーのスタート地点に「古代の中国の貨幣」コーナーが配置されているのか、その理由も分かる。

さて、金属貨幣が、貴金属の品位・重量で交換価値を表す秤量貨幣から、一定の、貴金属の品位・重量と形状を有し、額面価格（交換価値）が記された計数貨幣へと発展するのは、よく知られた事実である。

とはいえ、計数貨幣は現在私たちが使用している通貨からも十分に理解できるものの、秤量貨幣は、少なくとも私にとって、なかなかイメージできるものではなかった。



そんな私に、これぞ秤量貨幣、とばかり鮮烈に思い知らせてくれたのが、展示されている石州灰吹切銀である。それは天正年間（1573～92年）に石見銀山産出の銀で造られた秤量貨幣であり、必要に応じて切り秤にかけて使用した、「切り遣い貨幣」である。展示品は、どこでも切り遣いできるよう多くの刻印が押されており、切った状態で展示されている。これを見て、私のもやもやも解消である。



もう一つ、実物を見ることで納得した事柄がある。貝が貨幣として使用されていたことは経済学のテキストでも、よく指摘されている。でも労働生産物であるからこそ貨幣になりうる、と理解する私にとって、なぜ貝が、となかなか腑におちなかったのが正直なところであった。

それを解決してくれたのは、展示されている、ヤップ島の「貝貨」である。工芸品とも言えるほど、蝶貝を実にきれいに磨き込んだものである。まさに労働生産物であるのが分かる。その点で、私の認識も改まった。

まさに「百聞は一見にしかず」である。

思いがけない発見もあった。

欧米などでは元首などの高名な人物が貨幣に描かれることは結構多い。

わが国では、明治時代の金貨に天皇の肖像を入れる意見があったものの、「現人神の天皇の肖像が人民の手に触れて汚れることは、恐れ多い」と、それに代えて龍の図案が採用されたという。

そして近年になってようやく人物像が描かれ



た貨幣が登場した。

2008（平成20）年より地方自治法施行60周年記念硬貨としてカラー・コインがシリーズで発行されてきているが、その中の2枚、坂本龍馬、大隈重信が描かれた貨幣がそれである。



外国のカラー・コインを見れば、デザインも自由奔放で、また、マリリン・モンローやエルビス・プレスリーなどが描かれたコインもある。

貨幣の図案にもその国の文化が反映されるのであろうか。

引用・参考資料

造幣局125年史編集委員会『造幣125年のあゆみ』
1996年

造幣博物館（大阪）ホームページ

(http://www.mint.go.jp/enjoy/plant-osaka/plant_museum.html)



造幣博物館 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-79 TEL06-6351-8509

博物館運営委員 商学部教授

頭を渡す

黒田 一 充

各地の神社には、常住の神職がいなため、他社の神職に兼任してもらって神事をするところが多い。そのようなところでは、神社の管理だけではなく、場合によっては祭りも氏子だけで行っている。氏子総代が祭りの準備をするところもあるが、一般的には氏子の男性の中から毎年交代で当番を決めている。この当番を、頭屋あるいは頭人とよび、当屋や禰人などの漢字をあてるところもある。

頭屋は家順が決まっていたり、抽籤で決めたりするが、嫁を迎えた際や長男が生まれた際など、地区で定められた条件の人に廻る場合もある。頭屋になると、神事やその後の宴会を主催し、祭りの参加者に振る舞いをするため、多額の出費がともなう。負担を均等化するために、氏子の家数が多い地区は一生に一度ということになっており、出費を軽減するために地区の集会所を使うようになったところも多い。

香川県善通寺市・木熊野神社の秋祭りの頭屋（統本）宅では、祭りの前に門口で御神舎とよぶ小祠を建てて神霊を迎え、御由留輪とよばれる小桶2個に、神社の前で汲んだ湧き水と、そこで洗った白米を入れて納める。宵宮には神輿が運ばれて、氏子地区の子ども獅子舞が奉納されるが、祭りにあわせて住居を建てなおすこともある（写真1）。祭りの当日は、ここから神輿が発出し、御由留輪を運ぶ頭屋の一行とは別

の道を通って、旅所の薬師堂へ向かう。頭屋宅に仮設の小祠を建てるところはあるが、神輿も頭屋宅から出発するのはきわめて珍しい。

頭屋が交代する際には儀礼があり、頭渡しとよぶところが多い。時期としては、年末や3月の年度末のところもあるが、多くはその神社で一番大きな祭りの際に行われる。頭渡しは関係者だけが集まって、その年と翌年の頭屋が盃を交わし、文書や道具類を引継ぐ。中には、氏子たちが見守る公開の場所で行うところもある。

香川県三豊市豊中町の熊岡八幡神社は、小高い山の上にあり、秋祭りには麓の宮池の畔にある旅所へ神輿が運ばれる。頭屋（頭元）は21地区が交代してつとめ、御供の準備や直会の世話をする。拝殿での神事の後に直会があり、その間に神輿へ獅子舞が奉納されて渡御に出発する。旅所への途中、石段下の神事場に神輿が一旦安置される。神事後、氏子地区の代表たちは神輿の前にコの字に並んで座り、神酒と小餅を入れた吸物膳が廻される。それが終わると宮司が中央に出て正面を向いて座り、その前で頭元と翌年の頭元を出す地区の代表が向かい合い、祭りの準備品などを記した書類を納めた黒漆塗の箱を手渡す引継ぎの儀礼がある（写真2）。

この神社では、頭元とは別に祭りで重要な役割をつとめる子どもが出る。オカヤモチ（一つ物）とよばれる生まれたばかりの赤ん坊で、母



写真1 木熊野神社・頭屋宅の御神舎と神輿（2013年）



写真2 熊岡八幡神社の頭渡し（2013年）



写真3 熊岡八幡神社のオカヤモチ (2013年)

親が抱き、父親は茅（ススキの穂）を持って行列に参加する（写真3）。土踏まずということでは神聖視されており、神事場ではこの茅を神輿の前に立て掛ける。茅は笠岡地区の聖地から刈って来るが、笠岡は頭元を出す地区には含まれない。オカヤモチは地区内の決まった5軒の家から出されたが、少子化のため氏子地区で生まれた子どもの中から選ぶようになっている。

頭屋も祭りの準備だけではなく、氏神への奉仕のために精進潔斎をするところがある。三重県熊野市二木島町の室古神社と甫母町の阿古師神社は、二木島浦の入り江の南北にあり、祭りは両社を船で廻る。もとは旧5月と旧11月だったが、1972年から11月3日だけになっている。両社の氏子からひとりずつ選ばれる頭屋（禰屋）は、ショウドともよばれ、12月1日の注連付祭で交代する。その際、海で禊ぎをして神職から数珠とよぶ首飾りを掛けてもらう。柳の枝108個を紐に通したもので、前任者から引継がれる。

翌年秋の土用の中日にはもうひとつ新しい数珠を作り、10月1日の注連掛けの日にあらかじめ神職に掛けなおしてもらう。この日から毎朝



写真4 二木島祭のショウド（右から2人目）とガズ（4人目）（1984年）



写真5 神内神社の弓神事 (1987年)

夕の海で禊ぎをし、祭り当日まで髪や髭に刃物を当ててはならないなど、厳しい精進潔斎に入る。

祭りは両社の境内で儀礼があるが、その際、烏帽子に直垂姿のショウドとともに、嫁入り衣装を着たガズが座る。ショウドの娘か親類の女兒がつとめるが、もとは、ショウドの妻の役だったと伝えられる（写真4）^{〔註1〕}。

三重県紀宝町^{（こうのうち）}神内の神内神社では、1月2日に弓神事が行われ、神社の田で4人の頭衆が鬼の字を書いた的に矢を射る。この烏帽子姿の頭衆も、首に竹の管の数珠を掛けている（写真5）。弓神事後、神社の御神体である岩窟の前で、頭渡しが行われる。その年の頭衆と翌年の頭衆が向かい合って互いの額をくっつけ、翌年の頭衆の首へ数珠を掛ける（写真6）。ここでは、頭衆の印である数珠を直接引継いでいる。

この儀礼の場は男性だけだが、例外として頭衆の家の女兒がふたり、御供持ちという役で参加している。本来は、もっと年長の女性であった可能性が高い。

よく似た儀礼を記した祭りの報



写真6 神内神社の頭渡し (1987年)

告がある。和歌山県北山村と三重県熊野市紀和町の県境は北山川が流れ、奥^{おく}瀬^{どろ}とよばれる溪谷になっている。現在は県境だが、もとは新宮の管轄下であったため、川沿いの集落の祭りは同じ形態をしていた。北山村小松と対岸にあった旧紀和町和田（廃村）で、昭和30年代に行われていた祭りの様子を、鳥越憲三郎が報告している^{〔註2〕}。

ここでは、7、8歳の小学生がショウドに選ばれ、その姉妹がガズとなった。ショウドになると、他家の料理を食べることができない、頭頂の髪の毛を元結で括るなどのしきたりがあった。

祭りの当日は、行列が神社へ向かった。ショウドと翌年のショウド（ミョウド）は、烏帽子姿で小刀を差し、行列先頭のガズは、首に竹の管を通した数珠を掛けて笠をかぶった。

神事後は頭屋宅へ戻り、当渡しが行われた。ショウドは数珠を烏帽子に掛けて上座に座り、川で禊ぎをして来たミョウドは、向き合って下座に座る。盃事後、ふたりの烏帽子に数珠を掛け、両手をついて額と額を突き合わせると、ショウドが「渡します」と言って数珠をミョウドの首に掛ける。これに対して、「受けました」とミョウドが答えて当渡しが終わる。神内神社と同じ儀礼が、行われていたのである。

ここでも、当渡しの印が数珠になっていた。この数珠はガズが首に掛けていたものであることから、本来はガズが祭祀の中心で、男子の祭祀に先行して、女子が祭祀権を掌握していた証拠だと、鳥越は指摘している。

奈良県天理市・大和神社の祭りには、9つの地区で頭屋が選ばれ、4月1日午後の神輿渡御に参加する。多くの地区での頭屋の申し送りは

祭りの後に行うが、成願寺町だけは神輿の渡御に先立って行われる。

頭屋宅の座敷では、仲人として氏子の最長老の男性が座り、その右隣に申し受け人として翌年の頭屋の男性が座る。左隣の申し送り人は今年の頭屋ではなく、晴着に赤い袴をした頭屋の妻が座る。三人の前には、酒盃やするめ・昆布・梅干しを載せた平膳を置く。その場の最年少者が給仕人となり、神酒を注いで頭屋の妻・翌年の頭屋・仲人の順に盃を交わす。最後に仲人が「無事引継がれました」と挨拶をし、平膳の品を分けて儀礼は終わる（写真7）。この間、今年の頭屋は隣の部屋から眺めるだけであり、頭屋の妻も午後の渡御行列には参加しない。

この事例の原形と思われる儀礼のことを、兵庫県西脇市黒田庄^{もんりゅう}門柳の住吉神社の秋祭りで聞いたことがある。神社での神事と直会が終わると一同は次の当人宅へ行き、御当渡しの盃事をする。現在は男性だけだが、以前はアイトウ（今年の当人）、ホントウ（翌年の当人）とも夫婦で出席し、アイトウの妻とホントウ、ホントウの妻とアイトウが向かい合って座り、盃を交わした。この儀礼は「嫁さんのかえっこ」ともよばれ、戦後しばらくまで行われていたという。これらの儀礼からは、男性祭祀の前に女性祭祀があったと単純には言い切れない。

年頭の弓神事を、関東地方ではオビシャとよぶところが多く、とくに千葉県は盛んである。八千代市八千代台西はかつて高津新田とよばれた地区で、2月11日に行われる諏訪神社の弓神事は、カラスの絵を描いた的を射ることからカラスビシャともいわれる。

社前での神事後、境内で参列者が順に矢を



写真7 天理市成願寺町の頭屋の申し送り（2008年）



写真8 高津新田のオトウワタシ（2013年）



写真9 高津新田のハッセ (2013年)

射る。最後にカラスの目に矢を突き刺し、農作物を荒らす害鳥を退治して豊作を祈る。これが終わると男性たちは集会所へ移動して、オトウワタシをする。地区には愛宕神社もあり、もとは別々の日だったが、現在は共同で行う。

まず、諏訪神社のオトウワタシがある。縦半分に切った大根を用意し、今年の当番ふたりと翌年の当番ふたりが向き合って座る。最初に今年の当番が神酒を飲むと、翌年の当番が両手に大根を持ち、平らな面に塩を付けて相手の両耳の上あたりに擦りつける。次は反対に、翌年の当番が神酒を飲むと、今年の当番がその頭に大根で塩を擦りつける(写真8)。ふたりの当番で主となる人をカシラとよぶが、続いて今年のカシラが、翌年のカシラの襟首から背中へ御神体を差し入れて、オトウワタシは終わる。御神体は、翌年のカラスビシャで準備する品物やその次の当番の氏名が記された書類で、カシラの家で神棚で1年間大切にまつられる。塩を擦りつけるのは、禊ぎと同じように清めの意味があると思われる。この後、愛宕神社の当番のオトウワタシになるが、儀礼は同じであり、それが終わると一同で食事をする。

引継ぎをしても当番の仕事は終わりではなく、午後に氏子の女性たちが集まるハッセがある。お菓子や甘酒などは当番夫婦が用意し、夫が女性たちに酒を注いで廻る(写真9)。会の終わりにハッセとよぶ歌を唱うことから、この集まりの名称にもなっているが、祭りが男性たちだけのものではなく、女性たちも参加していることがよくわかる。

同じような事例は、各地のオビシャでもみられる。館山市茂名・十二所神社の祭りでは、現



写真10 十二所神社の里芋祭 (2012年)

在弓神事はなくなり、器に山積みした里芋を神前に供える(写真10)。里芋は、地区の全戸が2軒ひと組で組織された積み番仲間が栽培し、当番の家に持ち寄って器に積む。神饌の準備や里芋の運搬、神事と直会、その後の当渡しも男性だけが参加する。

翌日午前中の片付けを終えると、午後は当番の家で「女たちのお籠もり」とよばれる集まりがあり、地区のほとんどの主婦が参加する。非公開だが、煮^{にしめ}や^{なます}、赤飯などの食事が出され、そのうち歌や踊りが披露されて賑やかに過ごすという。

祭りの儀礼に女性たちは参加しないが、里芋を育てるのも各家の妻たちの協力がなければむずかしい。この集まりは、祭りの裏方を支えてきた女性たちを慰労する場である。祭りの儀礼の場には男性たちだけしかいなくても、女性たちも一緒に参加しているということを、これらの事例は伝えている。

頭屋というのは当番の家の夫だけを指しているところが多いが、夫が頭屋をつとめるとはいっても、妻の協力がなければ1年間の役目をおえることはできない。頭屋を受けるということは、妻や子どもたちも含めて家族で当番を引き受けているのである。

註1 二木島祭は、2010年を最後に休止している。

註2 鳥越憲三郎「熊野北山峡の神祭」(豊中市立民俗館『民俗』1-5、1957年。日本民家集落博物館『民俗(復刻版)』上巻に収録、2006年)。

三村幸一が撮った民俗写真から50年

吉 野 なつこ

写真1は、昭和39(1964)年、大阪府豊能郡能勢町天王のキツネガエリの様子である。白黒にも関わらず、鮮やかに子供たちの表情を切り取ったこの写真は、大阪の写真家三村幸一が撮影した。

明治36(1903)年生まれの三村幸一は、文楽写真家として知られた人物である。戦前から50年以上にわたって文楽を撮影し続け、それらの写真は国立文楽劇場の公演パンフレットや解説本に使われた。一方で、祭りや民俗行事にも興味を持ち、全国各地へと撮影に出掛けた。また、民俗学の研究者とともに学術調査に同行し、記録のために撮影した写真を研究者や雑誌に提供した。

三村の没後、貴重な写真類は大阪歴史博物館に寄贈された。現在関西大学大阪都市遺産研究センターでは、大阪歴史博物館と共同で、保存と分析のため、寄贈された写真資料のうち祭りを撮影した白黒ネガフィルムのデジタル化を進めている。本稿ではその成果の中から二つの行事を取り上げ、三村が撮影した時点から約半世紀が経ち、行事がどのように変化したのかを、三村の調査ノートと、現地調査での聞き取りを手掛かりに追ってみたい。

キツネガエリは、子供たちが集落から害獣の象徴であるキツネを追い出して福を招く小正月の行事で、福井、京都、兵庫、鳥取にかけて広く分布している。現在大阪府内では、能勢町天王だけで行われている。

三村の調査ノートによると、昭和39年当時は、

7歳から12歳の男児が行事に参加していた。昭和11(1936)年生まれの男性から伺った話によると、子供の頃は、子供の人数が多いため幼稚園から小学校四年生までの男児が一軒につき一人だけ行事に参加したという。

子供たちは、家で作った幣を手に午前2時頃区長の家を集まり、区長が作った藁キツネを受けとると、それを先頭にして集落の上手から一軒ずつ家をまわる。各家の庭では、「われはなにをするぞいやい きつねがえりをするぞいやい きつねのすしを いくおけつけて ななおけながら えん えん ぱっさりこ 貧乏キツネ追い出せ 福キツネ追い込め」と太鼓を叩きながら歌い、手に持った幣を振る。幣は振るたびちぎれて落ちるが、家人はそれを「福の神」といって拾って神棚に祀る。各家から30円から100円をご祝儀として貰い、行事が終わると子供たちで平等に分配する。日暮れまでかけてすべての家をまわると、藁キツネの口に10円玉を一枚挟み、橋の上から投げて川へ流す。昭和6(1931)年生まれの男性の話によると、その後区長の家で茶菓子をいただき、お金を分配してもらって家路についたという。

それでは現在はどうのように行事が変化したのだろうか。14日の行事であったキツネガエリの日程は、成人の日に変更されており、平成26(2014)年は1月13日に行われた。

行事の内容にはほとんど変化はみられない。子供たちは午前11時30分に天王神社に集合し、神社の前で二回歌を歌った後に出発、短い休憩



写真1 天王のキツネガエリ (1964年三村幸一撮影)
[大阪歴史博物館所蔵・三村幸一撮影写真より]



写真2 天王のキツネガエリ (2014年筆者撮影)

を挟みながら、17時頃までかけて各家をまわる。歌の歌詞は昔と変わらず、家の人がいる場合は2回歌を歌い、500円から1000円程のご祝儀を貰い、代わりに幣をちぎったものを手渡す。留守の家は一回歌を歌って次の家へ行く。最後にキツネの口に五円玉を挟み、川へと流す。

昭和39年と異なる点は、行事に女兒も加わるようになったことである。現在は幼稚園から中学校三年生までの男女が行事に参加することができ、平成26(2014)年は11人の子供が参加した。しかし、少子化によって年々参加者が減少しており、現在キツネガエリは存続の危機にある。

次に、兵庫県神戸市西区押部谷町木津・顕宗仁賢神社の講頭を紹介したい。写真3は、昭和38(1963)年の様子である。

兵庫県には、一年に二度、春と秋に集落の人々が神社や寺に集まって集団で祈願をしたあとに直会をする「オトウ」と呼ばれる行事が広く分布しており、木津では同様の行事を講頭と呼ぶ。

では、昭和38年当時の様子を三村の調査ノートからみてみよう。

1月2日、講頭の参加者は、オオトシと呼ばれる約1メートルの楠に小石を1つ入れた藁ツトを2つくり付けたものを持参し、神社の前に立てかけておく。参加者は神社の横の長殿に長方形に座し、シュウシと呼ばれる直会をする。直会では、アマノウオと呼ばれるすめを小さく切って丸めたものや、白餅、米を蒸したもの、伊勢講の土産などが配られた。

直会の最中に神社の前に子供たちが集まり、一人に一本ずつオオトシを持つ。大人一人が長殿の外に出て、「オオトシ、ハナドシ、ヨイヨイワ」と繰り返し音頭を取り、それに合わせて子供たちがオオトシの茎で地面を叩く。この時オオトシの葉が落ちるほど豊作であるといわれた。

シュウシが終わると、約40センチ四方の四角い板にイノシシと鹿の絵を描いた的を射て、行事を終える。オオトシは各自が持ち帰り、苗代に種籾を蒔く時に苗代田に立てたという。

この行事は現在どのように変化したのだろうか。平成23(2011)年の現地調査では、講頭は1月2日に行われているが、オオトシで地面を叩く行事は廃絶されていた。また、かつては30軒程の特定の家だけが行事に参加し、6人ずつが行事の当番にあっていた。木津の中は5つ



写真3 木津・オオトシを持つ子ども達
(1963年三村幸一撮影)

[大阪歴史博物館所蔵・三村幸一撮影写真より]



写真4 木津の弓射ち (2011年筆者撮影)

の隣保に分かれているが、現在は隣保を単位として順番に当番を務める形へ変わっている。弓射ちは以前と変わらない形で行われているが、シュウシは仕出しの弁当を食べるようになるなど簡略化されている。

木津と同様に、年頭に神社や寺などに常緑樹の枝を持ち寄り、その枝を振ったり叩いたりすることによって豊作を祈願する行事は、兵庫県南部を中心に、大阪府、京都府などでも行われていたが、現在はその多くが廃絶されている。廃絶した理由として、生業の変化によって稲作の重要度が下がり、豊作祈願を必要としなくなったことや、苗代田で稲の苗を栽培せず、農協で購入するようになって、苗代田がなくなったことなどが挙げられる。

三村が撮影した写真には、現在も変わらずに行われているもの、すでに廃絶したものなど様々な行事が含まれており、当時の様子を記録した貴重な資料となっている。関西大学大阪都市遺産研究センターでは、今後も大阪歴史博物館と共同でネガフィルムのデジタル化を進めていきたい。

やきもの見聞録(5) 小石原焼(福岡県)・小鹿田焼(大分県)

民芸のやきものを訪ねて

熊 博 毅

関西大学博物館に1枚の大皿が所蔵されている。直径約62cm。2尺の大物で、博物館のデータベースには、「昭和48年(1973)3月に梶原藤徳氏から寄贈された小鹿田焼刷毛目大皿」と記録されている。かねてから小鹿田焼の里を訪ねてみたいと思っていたので、この皿の謂れを調べることを訪問のきっかけにしようと思い、再度、収蔵されている大皿を点検してみた。

中心から円と波模様が交互に同心円状に描かれ、その上に、焼成時に加わった灰緑色の釉が流れて見事な景色を形づく



関西大学博物館所蔵の大皿

っている。いかにも民芸のやきものらしい、シンプルながらも雰囲気の良い作品である。

裏に返すと、高台の中に陶印が2つ押されているのに気がついた。ひとつは「藤」。この皿を寄贈されたのは梶原藤徳



2つの陶印

氏とのことであるから、もしかすると、寄贈者自身の作品なのかもしれない。その可能性を私は想像した。

もうひとつの陶印は二行に分ち書きされており、最初の方は明らかに「小石原焼」と読める。それに続く二字は一見判読に苦しむが、いずれにせよ、従来「小鹿田焼」として伝えられてきた作品は「小石原焼」と訂正しなければならないようである。

小石原焼の歴史

天和2年(1682)、第3代福岡藩主黒田光之が、上座郡小石原の南にある中野に肥前国松浦郡伊万里から陶工を招き、明の製法にならって高取八之丞(文禄の役後、日本に連れてこられた朝鮮の陶工八山(高取八蔵)の孫)とともに小石原の土で磁器を焼かせたことが中野(小石原)焼の始まりとされている(貝原益軒著『筑前国続風土記』)。

その後、貞享から正徳年間(1688~1715)にかけて中野(小石原)焼は大いに繁盛し、皿山奉行も置かれたが、正徳ごろには燃料の薪を取り尽くしたため、発展に陰りが出た。さらに小石原の土が磁器生産に向かないことから、民用の生活用品を陶器で作り始めるようになった。こうして茶陶の高取焼と民陶の中野(小石原)焼、2つの流れが始まった(『筑前国続風土記附録』)。

民需のやきものに転換した小石原焼ではあったが、その後次第に衰微するようになり、安政2年(1855)には借財した金子を村中で配分しなければならぬような事態も起こった。そして明治4年(1872)の廃藩置県により、藩窯は廃止されてしまった。

小石原焼と民芸運動

小石原焼が再び注目を集めるようになったのは昭和になってからである。柳宗悦(1889~1961)が小石原村を訪ね、民芸運動を広めたのがきっかけであった。

民芸運動とは、大正時代後半に柳が中心となって始めた工芸をめぐる活動で、「日本民藝協会」と「日本民芸協団」がその運動を担っている。「日本民藝協会」は柳を会長として昭和9年(1934)に組織された。もう一つの「日本民芸協団」は、もともと民藝協会の会員であった三宅忠一(1900~1980)が、柳と袂を分かって組織したもので、大阪に開設された日本工芸館を活動の拠点としている。小石原焼はこの二つ

の民芸運動に深い関係を持つ。

柳や河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチら民芸運動のメンバーが日田の山奥にある小鹿田を訪れたのは昭和29年（1954）4月で、翌5月には小石原にも訪れている。柳らの民芸運動は小石原に新たな時代の到来を感じさせたが、さらに強い影響を与えたのは三宅忠一が設立した日本民芸協団であった。

三宅忠一と日本民芸協団

もともと三宅は柳の著書に感銘を受け、昭和10年（1935）ころから民芸運動に参加し、日本民藝協会の中心メンバーの一人になっていった。大阪の料理店の店長である実業家の三宅は、大阪に地盤を置き、精力的に運動を推進した。

昭和26年（1951）、日本民藝協会大阪支部の運動拠点として日本工芸館が建設されたが、昭和34年（1959）、柳らとの考えの相違を理由に三宅は日本民藝協会を脱会し、日本民芸協団を設立した。三宅が主張したのは、民芸運動は作家の関与を排し、工人の生産活動を助成すべきだということであった。

日本民芸協団は、新たに立て直した大阪の日本工芸館を拠点として全国で50を超える支部を持つ大きな組織になっていった。そして三宅が最も精力的に自らの思想を実践したのが小石原であった。三宅には小石原を自らの手で育てていこうという考えがあり、私費を投じて経済的な支援も行った。その小石原で三宅と強い関係をもったのが梶原藤徳氏であった。

梶原藤徳氏

今回、小石原訪問にあたって「梶原藤徳」「小石原焼」をキーワードに調べた結果、いくつかの事柄が分かってきた。残念ながら、氏は、私が訪問する少し前に亡くなっており、関西大学博物館に大皿を寄贈した経緯をご本人の口から直接お聞きすることはできなかったが、ご令室と二男の真也氏にお会いすることはできた。

梶原藤徳氏は昭和12年（1937）、福岡県朝倉郡小石原村皿山の窯元梶原藤助氏の長男として誕生し、昭和30年（1955）、小石原村在住で陶芸の先輩である太田熊雄氏に師事してロクロ技術を学び、その後、家業の「△（ヤマイチ）窯」を若くして受け継いだ。関西大学博物館が所蔵

する大皿の裏に押され、判読が不可能だった陶印「小石原焼■窯」の「■窯」は「△窯」であり、「こいしわらやき やまいちがま」と読むべきことも明らかになった。

昭和32年（1957）、第13回福岡県展で朝日新聞社賞を受賞したのを契機として以後、全日本民芸展や伝統工芸展などで数多くの受賞を重ねた。

その一方、昭和46年（1971）、34歳のときに村会議員となり、46歳まで12年間にわたって村の発展に尽くし、最後は村会議長も務めた。昭和50年（1975）に小石原焼は通産省の伝統的工芸品に指定されるが、そこに氏の大きな働きがあったことは想像に難くない。

小石原焼の窯元は現在50軒ほどあり、それらがまとまって小石原焼陶器協同組合を結成しているが、氏は組合長も務め、昭和60年（1985）には高松宮殿下が陶房に立ち寄り、平成2年（1990）には天皇陛下の前で作陶技を実演している。

梶原真也氏を訪ねたのは、小石原の山々が秋色に染まった平成25年（2013）10月の終わりであった。工

房の2階、藤徳氏の大作が多数陳列された応接室でお話を伺った。

もともと小石原は半陶半農の地で、昔は9軒しか窯元が存在せず、現在の小鹿田焼同様、一子相伝で家業を継承していた。それが、私有地の陶土が枯渇し、国有地の陶土を採掘させてもらうべく国に願い出た際、やきものに従事する人に対し門戸を広げるよう指示されたのが、小



ヤマイチ窯



数々の賞状と作品

石原で窯元が増えていった理由だという。

昭和33年（1958）、ブリュッセル世界工芸展で小石原焼がグランプリを受賞したことから需要が増え、生産量が増加するようになる。村の共同窯を使わず、個人窯を築くようになるのもこのころであった。2年後の昭和35年（1960）には日本民芸協団により皿山地区に財団法人日本工芸館小石原分館が設置され、九州各地の古陶器の収集、陳列が行われるようになった。三宅と梶原藤徳氏の関係が始まり、強まっていったのも、同じころと想像される。

大皿寄贈の経緯の可能性

作品が関西大学へ寄贈されたのが40年前のこととあって、残念ながら真也氏も詳しい経緯は聞き及んでいなかった。そこで「関西大学は大阪の大学」「大阪に本拠を置く日本民芸協団」「大阪の文化人、三宅忠一氏」といったことを組み合わせ、いくつかの可能性を探ってみた。

大皿が寄贈された昭和48年（1973）の前年には、本学の網干善教助教授（当時、のち名誉教授）が奈良県の明日香村で高松塚古墳を発掘し、極彩色の壁画を発見して一大センセーションを巻き起こしていた。そのとき、文化庁との折衝などについて、さまざまな指示をしたのは末永雅雄名誉教授であった。末永名誉教授は文化庁の文化財保護審議会専門委員などを務め、文化財には深い造詣を持っていた。広い人脈の中で日本民芸協団の三宅忠一氏と知り合いであった可能性も考えられる。藤徳氏、三宅氏、末永名誉教授の関係で作品が関西大学に寄贈されたのではないか、というのが私の想像である。

「櫛目象嵌灰釉大皿」。今後の記録のため、作品の名前を確認すると真也氏はこう教えてくれた。器の表面に櫛で模様を描き、削りとった部分に白化粧土を埋め込み、その上から灰釉をかけて焼成したものである。小石原で櫛目象嵌の手法を始めたのは藤徳氏が初めてだという。

小石原焼伝統産業会館

藤徳氏の作品や陶房の登り窯などを拝見してヤマイチ窯を辞したあと、折角小石原まで来たのだから小石原焼伝統産業会館を見学することにした。この会館は小石原焼の歴史を学習するとともに、作陶体験もできる施設として平成10

年（1998）10月、小石原森林公園の一角にオープンした。

4つの展示室と研修室、茶室、事務室

からなり、展示室では小石原焼の古窯や先人たちの遺作、さらに現在50軒ほどある窯元の新作や代表作など、創作活動の精華を一望することができる。また、体験棟では絵付けや手びねり体験などを楽しめるようになっている。

さらに平成20年（2008）度には、伝統的な焼成方法を継承していく目的で登り窯も整備された。この登り窯では、小石原の若い陶芸家たちが定期的に窯焚きを行っているという。



小石原焼伝統産業会館



小石原焼伝統産業会館の登り窯

小石原から小鹿田へ

小石原を訪ねた翌日、もうひとつの民陶の里、小鹿田を訪ねた。江戸時代に徳川幕府の天領であった大分県日田市から車で1時間ほど北西の山あいへ分け入ったところに小鹿田の里はある。さらにそこから北西方向へ直線距離で10kmほど進むと小石原に至るというのが両窯の位置関係である。

小鹿田では、まず小鹿田焼陶芸館を訪れた。この陶芸館は皿山地区の小高い丘の上に立っている。国の重要無形文化財として指定されている「小鹿田焼」のことを、多くの来訪者により深く理解してもらうための施設として、それまでにあったものを全面的に改築し、平成24年（2012）に新



小鹿田焼陶芸館

しく生まれ変わった。

展示室があるのは、木造瓦葺き2階建の瀟洒な和風建築の1階部分である。「プロローグ」から始まり、「小鹿田焼の歴史・その足跡を辿る」「生活器としての小鹿田焼」「小鹿田焼が出来るまで」「小鹿田焼の里を支える自然・環境」といったコーナーに分けて展示がなされている。

日本の音風景100選の1つ

ギギィ、ザバー、ゴトン！ ギギィ、ザバー、ゴトン……。

小鹿田焼陶芸館の外に出ると、耳慣れない音が聞こえてきた。一定のリズムで刻まれるこの音が何であるのか、最初はよく分からなかったが、音に誘われて、国の重要文化的景観に選定されている集落の中を歩くと、自然の水力を利用して陶土を細かく粉碎する唐臼であることが分かった。



国の重要文化的景観に選定されている小鹿田の里

川から引いた水が丸太の根元部をえぐった大きな水舟に溜まっていく。一定量を超えると水の重みで丸太が持ち上がり、同時に水が流れ出る。反動で杵のついた頭部が下がり、うず高く積まれた陶土を叩く。鹿威しの原理である。これを繰り返して土は小さく砕かれていく。



唐臼

今でもこうした方法で土づくりをしていることは驚きであるが、前日、梶原真也氏から聞いた話では、小石原でも以前は唐臼で土作りがなされていたという。やきものの作りが小石原から

小鹿田へ伝播したという歴史を考えれば、唐臼の技術も小石原から伝わったのかもしれない。

この唐臼の音は「日本の音風景100選」のひとつに選ばれている。音の間隔はいたって長いですが、次の音を待ち遠しく思うのは旅人の心だろうか。何だかとても懐かしく、同時にちょっぴり切ない気持ちにさせる音色である。地元では「唐臼が鳴く」というらしい。

小鹿田焼の歴史

小鹿田焼は享保年間（1716～1735）に小石原焼中野窯の柳瀬三右衛門と日田郡大鶴村の黒木十兵衛によって開窯された。これに小鹿田地域の仙頭であった坂本家が土地提供者として加わり、小鹿田焼の基礎が築かれた。

現時点では開窯当時のやきものがどのようなものであったのかは確認されていないが、小石原・三右衛門の中野窯が民陶窯であったことから、当初より生活雑器が焼かれていたと想像されている。「打ち掛け」「流し掛け」「鉛釉」などの装飾技法も現代とさほど変わっていない。

開窯以来、半農半陶の窯場であったが、大正末期から昭和初期にかけて「飛び鉋」や「打ち刷毛目」の技法が取り入れられ、さらに柳宗悦により小鹿田焼が紹介されてからは広く世に知られるようになった。そして平成7年（1995）5月、10軒の窯元で組織する小鹿田焼技術保存会は国の重要無形文化財に指定された。そのことも作用してか、小鹿田の皿山には一年を通じてかなりの数の陶芸愛好家や観光客が訪れるようになっている。

歴史的に見ると、小石原焼と小鹿田焼は兄弟の関係にある。装飾技法も似かよっており、300年の間にはお互いに影響しあったところもあるのだろう。

そして現代。絶えず変革が求められる今の時代にあって、変わらなければならないことと、変わってはいけないことをしっかりと見極めながら、ともに300年来の伝統を守ろうとしている。その一途さは、むしろ潔く、心地よい。民芸のやきものらしい素朴さと温かさも、そうしたところから生まれているのかもしれない。

◆ 博物館だより

◇平成25年度ミュージアム講座「なにわの文化遺産（8）」では、59名の方から聴講の申込みをいただき、3日間開講しました。

10月23日「日本の写真コレクション—南木芳太郎と『郷土研究 上方』—」

大阪城天守閣研究副主幹 宮本祐次

10月30日「日本の写真コレクション—三村幸一と日本の祭り—」

文学部教授 黒田一充

11月6日「日本の写真コレクション—横山松三郎から小川一真へ 日本の文化財写真の系譜—」

東京国立博物館学芸研究部保存修復室長 富坂 賢

◇11月10日から15日まで博物館実習展を開催しました。今年度は48名の実習生が「刺しゅう〜祈りがもたらす手しごと」「茶器 道具から見る茶の湯」「切手から見る日本—切手ブームと高度経済成長期—」「子どものおもちゃ〜1970年代を見る〜」「いつまでも健康に〜今も昔も変わらぬ思い〜」「お風呂屋さんへ行こう」の6班に分かれて、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。会期中に484名のかたにご覧いただきました。

◇本館が中心となって、大阪にある大学博物館5館（大阪大谷大学博物館・大阪音楽大学音楽博物館・大阪芸術大学博物館・大阪商業大学商業史博物館・学校法人大阪医科大学歴史資料館）と連携して「かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会」を組織し、文化庁の補助事業に申請し、その後、大阪大学総合芸術博物館や大阪青山歴史文学博物館、奈良大学博物館、追手門学院大学附属図書館宮本輝ミュージアム、大阪樟蔭女子大学田辺聖子文学館の5館が加わり、合計11館で「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」を設立しました。平成25年度は、文化庁の補助金を受けて4つのプログラムを実施しました。また、吹田市立博物館が中核となる北大阪ミュージアム・ネットワーク（北大阪にある50の博物館・美術館等が緩やかに連携することを目的としたネットワーク）にも参画して、11月3日・4日に国立民族学博物館でミュージアムメッセを開催しました。これからも地域と密着して、緩やかな連携活動を続けていきたいと思っています。

◇本館へ寄贈いただいた資料を紹介します。まずは植田兼司様から仏具の鈴（りん）、これは阡陵No63で紹介させていただいた資料です。また、篤志家の熊 敏雄様から日本刀6振り、前館長の高橋隆博先生から中国明代の青花雲龍文皿と朝鮮高麗前期の青磁雲鶴文碗の2点。さらに、本学校友の遠山慶一様、同じく本学校友で榎原考古学研究所附属博物館元館長の河上邦彦先生から、これまでに引き続き貴重な資料の数々をご寄贈いただきました。今後誌面や展示等で披露し、充分活用していきたいと考えています。



編集後記

◇表紙は、今年の干支にちなんで、チャグチャグ馬コ（ちゃぐちゃぐうまっこ）祭りの馬玩具です。チャグチャグ馬コとは、毎年6月に実施される岩手県祭りで、馬の首に付けた鈴がチャグチャグと鳴る事から命名されています。本館では、篤志家から寄贈を受けたものも含めて約100点の郷土玩具を所蔵しています。

◇改装工事のため、昨夏より休館していましたが、4月1日から、「関西大学創立130周年記念事業 図書館創設100周年・博物館開設20周年記念 図書館・博物館連携企画展『関西大学名品万華鏡—館館選 イチオシ！—』」でもってリニューアルオープンします。第1展示室には、長さ15mの大型展示ケースが設置され、本学図書館が所蔵する大坂画壇の秀作をご覧いただくことができます。会期は5月18日までです。また、第2展示室（村野藤吾設計の簡文館円形部分）には、本山コレクション（考古資料）を常設展示いたしますので、併せてご覧ください。

